

げた学校と、とり上げない両小学校における児童の衣服状態について、2,3 の検討を行なった。

2. 1)場所と学校：N市の軽装をとり上げた学校(A)と、とり上げなかった学校(B)。2)対象児童：両校の3年生と6年生のそれぞれ男女計400名。3)調査時期：44年12月、45年5月、7月の3回。4)調査項目：学校別、学年別、男女別にそれぞれ(a)衣服重量、(b)対体重比率、(c)着用衣服の材料と着用順序、枚数、(d)肌着の型と材料、(e)被覆面積の5項目について調査した。

3. 1)一般に平均衣服重量とその対体重比は、AがBより低かった。また両校とも低学年は高学年のそれより高い傾向であった。2)12月の最外层衣類は、Aでは男女共セーター、カーディガンが多く、Bでは高学年男子でジャンパー、ジャケットが多かった。衣服材料の着用順序は両校とも、冬は多種多様で、一定の傾向はなかった。3)肌着の材質：Bの高学年男子を除き、他は一般にAがBより木綿の使用が多かった。4)被覆面積では、冬期に下肢部を露出しているものがAの高学年男子にみられた。

C—40 軽装奨励校における児童の着衣状況

新潟大教育 高橋 類子

1. 都市の公害の進行している中で、都市の学童体育が重要な問題として考えられ、当該校ではそれぞれ体育振興に工夫がなされている。本調査は、N市の公害の多い地区において、体育振興の一手段として軽装をとりあ